
隨泉寺寺報

平成27年（2015年） 2月号 第533号

TEL082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺 仏婦講座

講師 正順寺住職 龍口了潤師

講題 『されど本願あり・・・。』

■物故会員追悼法要～縁のある人々のご恩を偲ぶ法要～

九条武子さんが亡くなられるとき、お兄さんのご門主様が《 安樂浄土にいたるひと 五濁悪世にかへりては 釈迦牟尼仏(しゃかむにぶつ)のごとくにて 利益衆生はきはもなし 》と仰せられてありますから、あなたもどうぞ、お釈迦様の通りになって帰っていらっしやい。お待ち申しております。」その言葉に対して、瀕死の武子夫人は、「また来ます」と答えられたそうです。

「この妹の、また来ますという所には、大いなる決定心があるものと思ひまして 非常に嬉しく私は思いました。」とお兄様のご門主様は述べておられます。

「また来ます」この終焉の応えこそ、武子夫人の信仰生活の結論ではなかったのではないかと思います。南無阿弥陀仏のお念仏に見守れながら 私たちも「また来ます」と言える 生活でありたいと思います。

2月の法座予定

- 2月 2日……………本部役員会
- 2月 8日……………掃除 高部
- 2月 15日朝席午前10時より……………物故会員追悼法要 おとき
- 2月 15日昼席午後1時より……………仏婦講座
- 3月 2日午後5時より……………門信徒会本部役員会

☆ インド紀行(7) 若院

3月3日、この日は早朝から、前日に上った霊鷲山から朝日を眺めてお勤めする予定でありましたため、5時起床でした。そうです。さっきまで庭で大きな音楽が鳴り響いていたため寝不足のうえ、朝からの登山はとっても気が乗らなかったんです。しかしこんなチャンスもなかなか無いので、自らを奮い立たせて、昨日と同じ登山道をひたすら下を向きながら登りました。目的地に着くと、いつもは人で賑わっているそうなのですが、この日は貸切状態でした。なので静寂の雰囲気の中、ゆっくりとした時間を過ごし、朝日を浴びながらお釈迦様に思いを馳せることができました。

早朝の霊鷲山参拝の後、ホテルに帰り昼からはお釈迦様が正覚成道（悟りを開かれた地）された地であるブダガヤのある町へと向かいました。ブダガヤへと向かう途中に前正覚山という山に登ることになりました。前正覚山とは名前の通り、お釈迦様が正覚（悟り）を開かれる前に立ち寄られた場所です。



お釈迦様は29才の時に出家をされてから6年間に厳しい苦行を行っていました。しかしその修行は断食などの厳しい苦行ものでありましたが、このまま苦行をしていても正覚を得る事ができないと悟られたお釈迦様は、苦行をやめられてスジャータという娘から乳粥の供養を受けられます。そしてその後にこの前正覚山で瞑想に入ろうとするのですが、瞑想を行っていた時に山が震動し、「ここは正覚成就の場所ではない」と山神のお告げがあったため山を下りられて悟りの開かれた場所であるブダガヤの菩提樹の下へと向かわれるのです。ちなみに余談ですが、スジャータという名前は私たちには馴染みのある名前ですね。コーヒーを飲むときに使用するスジャータのミルクはこの乳粥を供養した娘の名前から付けられたそうです。前正覚山の中腹には洞窟があり、ここでお釈迦様は瞑想に入っていたそうです。ここは現在はチベット仏教の寺院があり、僧侶たちによってこの場所は大切に守られておられます。洞窟の中は四畳ほどの広さしかなく、中には苦行をされていたお釈迦様のお姿が窺える仏像が安置されていました。その仏像は全身に骨格と血管が浮き出し、目や腹部はすさまじくくぼんでおり、お釈迦様が行っていた苦行がいかに厳しいものであったと全身で感じる事ができ、いよいよこれから正覚成道された地であるブダガヤへと向かう前に背筋が伸びるような感覚で前正覚山を後にしました。



☆浄土真宗本願寺派前門主 大谷光真著 「「あけぼのすぎ」

― 浄土真宗一口法話 ―2月

「愚かさとは深い知性と謙虚さである」 (平沢 興)

浄土真宗の教えは、この世の常識をひっくり返すものであるというのが私の持論です。今日の日本では、人々がだんだん賢くなってきたように感じられます。科学技術の進歩は申すまでもなく、自分や自分の組織団体の利益を計ることについて、更に、都合が悪くなると、責任を組織に押しつけて逃げる姿にもよく現れています。でも、このような賢さでは、生きる意味や喜び、いのちの尊さはわかりませんし、社会も乱れます。

親鸞聖人やその師匠、法然聖人のお言葉からわかるのは、阿弥陀如来さまの智慧に照らされて、受け止められた自らの愚かさです。自らの愚かさに気付くことは、実は、本当の賢さではないでしょうか。そこから、自分のいのちと他のいのちを等しく見ることを知らされ、御同朋御同行と支え合って生きる道が開かれます。



仏教婦人会物故会員追悼法要

平成26年度 物故者追悼法要案内先

H27.2.15

1	椿谷	佐登子	85才	椿谷 通俊様	長者原東
2	中本	マツエ	103才	中本 慎也様	上平原第1
3	加藤	二三枝	97才	加藤 勝久様	井原
4	岡埜	千代子	95才	岡埜 宏和様	高部
5	中村	敏子	78才	中村 昭子様	出宮
6	岩崎	幸子	82才	岩崎 保夫様	井原
7	小山	アキ子	91才	濱本 スエ子様	中須賀
8	谷	香織	85才	谷 博司様	瀬野川団地

10月 東井 義雄師

「自分の家」ほんとうは「ただごとでないところ」

忘れることができないのは、文部大臣から「教育功労賞」をいただくことになって上京するときのことでした。山陰線から東海道線を通して上京する寝台特急「出雲号」というのに乗ったのですが、私は、三股寝台の一番上段ということになりました。ところが、向こう側の一番上に寝ているおじいさんの、何とも形容し難い高さのものすごいびきが気になって、どうしてみても眠れません。指で両耳を塞いでも聞こえてくるのです。一から順番に数を数えることに精神の集中をはかろうとしてみるのですが、何十遍、それを繰り返してみても、いびきに掻き乱されて失敗してしまいます。一時を過ぎて、二時を過ぎて、同じことです。

ところが、ハッと気がつきました。「僅かな寝台料金を払っただけで、寝たまま上京して賞状を受ける、賞状を受けるだけの値打もない者が賞状を受け、新宮殿で天皇さまのお言葉をいただく、考えてみれば、ぜいたく過ぎるではないか。しかも、こんな私を、機関士さんは、まんじりともせず、闇の前方を見つめ、信号を見誤らないように運転してくる、ぜいたく過ぎるではないか」

そう気がついたら、横着でぜいたくな私か、はずかしくなっていました。そう気がついたとたん、眠ってしまったらしく、気がついてみたら、カーテンの隙間から、朝の光が射し込んでいました。

自分の家でもないのに、気ままに眠らせてもらえる、気がついてみれば、ただごとでない、ありがたいことであるのではないのでしょうか。

「自分の家でもないのに」と申しましたが、「自分の家」であっても、何も彼も忘れて、安心して「眠らせてもらえる」「自分の家」も、ほんとうは「ただごとでないところ」であるのではないのでしょうか



「自分の家」ほんとうは「ただごとでないところ」



- ☆ 瀬野川仏教婦人連合会 50周年記念講演会 講師 釋 徹宗先生
- ☆ 3月12日(木) 午後1時より サンピア安芸(JA海田の4F)
- ☆ 昭和35年9月11日 瀬野川町仏教婦人連合会が結成されました。《家庭の園に念仏の花を咲かせましょう》のスローガンのもと 《社会に念仏を》の実践活動を確認し、《仏の子供を育てましょう》と【お念仏のまち、瀬野川】の建設に心を注がれました。
- ☆ 50周年を迎えたことに当たり、先人の【お念仏のまち、瀬野川】という熱い思いを大切に、お念仏の声を子や孫に、次の50年に伝えるべく、この記念行事を開催します。 誘い合わせてご参加ください。 ※ 入場無料